

## 2月26日の市民講座は、岡崎仁美さん

午後6時半から8時半まで、名古屋市女性会館視聴覚室で行います。講師はCAPNA研修企画委員の岡崎仁美さんです。「地球市民として」というテーマのもと、暴力のない社会の実現に向けて、自分にできることを一緒に考えてみませんか？

暴力の背景にある『ジェンダー』意識により、女も男も縛られ苦しめられています。そしてその中で育っていく子どもの心には、支配、被支配の芽が植え付けられていきます。対等な人間として尊重し合って生きることを、暴力の中を生きぬいてきた人たちから学びましょう。参加費は、会員無料、一般500円です。

### ジャスコの黄色いレシートでCAPNAを応援してください。

イオン(株)の行う社会貢献活動の一つ「幸せの黄色いレシートキャンペーン」にCAPNAも参加します。このキャンペーンは毎月11日の「イオンデー」にのみ発行されるジャスコの黄色いレシートを、各店に設置された専用投函ボックスの中で自分が応援するボランティア団体のボックスに投函していただく、と言うものです。

みなさんがCAPNAのボックスにレシートを入れてくださると、そのレシート合計額の1%分の商品がCAPNAの活動のためにイオンから寄付されます。

CAPNAのボックスは3月11日から『名西店』の他、一部のジャスコ店舗に設置される予定です。どこかでお見かけの際は、どうぞご協力ください。

### Book 紹介

#### 「かげろうの家」

横川和夫 保坂渉著 共同通信社 本体価格1262円

かつて東京の綾瀬という町に、女子高生を監禁殺害しコンクリート詰めにして捨てた少年たちがいました。本書は、世間から鬼畜と呼ばれ責め立てられた彼らとその親たちの日常や生い立ちにスポットを当て、綿密な取材と冷静な視点のもとに書かれたルポルタージュです。

年々凶悪化、低年齢化する昨今の少年事件を踏まえて、ぜひ一度お読みください。

#### 「たすけて！私は子どもを虐待したくない」

長谷川博一著 経営房 本体価格1700円

我が子を虐待している親の苦悩は計り知れない。そして、つらい過去と向き合わずには前に進めない。その事実を、周囲にいる人間がもっとよく理解していく事が大切だ。

臨床経験豊富な著者が私たちに示唆するものは、虐待の二文字を通して訴える「人間の尊厳を護ることが生きる力を生み出す」と言う事。

全編を通じて、著者の虐待親に対する眼差しはあたたかい。

ご寄付 次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。

(12-1月分、順不同、敬称略)

【団体】第34回熱田青年の家ヤングフェスティバル実行委員会、中部日本放送(株)、豊川市立東部中学校、名古屋IIゾントクラブ

【個人】曾根富美子、的場定美、水野邦彦、矢満田篤二、山田裕子、エルマ・クルーズ(レストランMisFitsの代表者)、他匿名の5人の方

## CAPNAニュースレター33号 (隔月刊17号)

2004年2月13日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

# キャプナ★ニュースレター

## 高橋さんに人権賞



祝う会で、花束を贈られる高橋昌久さん

CAPNA 理事の「ドクタカさん」こと、小児科医の高橋昌久さん(38)が、第15回名古屋弁護士会の人権賞を受賞。2月7日夜、豊田市のホテル豊田キャッスルで、受賞を祝う会が行われました。

CAPNA では、理事の矢満田篤二さんが第8回(1996年度)に受賞、団体としてのCAPNAも第11回(1999年度)に受賞しており、3度目の栄冠となりました。 [2面に続く](#)

Vol.

33

人権賞を受賞した高橋昌久さんは、名大付属病院で小児科外来を担当する中で、虐待や不登校の重い現状に気づき、CAPNAに参加。「子どもの心をもっと知りたい」と、2000年には臨床心理士の資格も得ました。豊田市の加茂病院に勤務していた時代は、当直や長時間労働が常態化する毎日の中で、仕事の合間を縫って、地域のネットワークづくりに奔走。そして、2002年に、こどもクリニック・パパを豊田市東梅坪町に開業。医療機関、学校、児童相談所などのネットワーク（CAPNE-T）の要としての役割を果たす一方、中学校のスクールカウンセラーとしても活動をしています。家庭では2児のやさしいパパです。

## おめでとう ドクタカさん！

### 人権賞・祝う会レポート



これを励みにしたい」と、誓っていました。

この日は、午前中の診療に続いて、午後からCAPNA・CAPNE-T共催の「保育関係者セミナー」の講師。その疲れも見せず、パーティー会場の地元参加者を一人ひとり紹介するホスト役も務め、日ごろのパワーを感じさせました。

「ドクタカ」のニックネームを付けたのは、本人。CAPNAの理事になったとき、他に弁護士の高橋さんがいたことから、区別しやすいようにと「ドクター・タカハシ」を略して命名しました。互いを「先生」と呼ばないCAPNAの雰囲気や、とても気に入っているそうです。

会場で目立ったのは、女性たちの姿。CAPNAのボランティアだけでなく、地元・豊田での子育て支援ネットや市民団体の関係者、若い患者さんたちなどで、だれもが心から受賞を喜んでいる様子でした。ドクタカさんが豊田で築いている人脈の温かさを感じる会になりました。

最後は、今や国民的ソングとなった「世界に一つだけの花」の斉唱。それぞれの「オンリー1」を大切にできる社会づくりを目指して、元気な歌声が会場に響きました。

そして、締めくくりに挨拶に立ったCAPNA監事の川上明彦さんは、豊田のネットワークについて「子どもたちを守る力強い連携が各地に広がっていくことが理想。亡くなった祖父江文宏さんが望んでいたのは、きっとこういう形だったんだろうと思う。今、この会場にも祖父江さんがきっと来ていて、喜んでると思う」と話していました。

祝う会で、冒頭の挨拶に立った岩城正光理事長は「人権賞を受賞する人は、他人の人権擁護に一生懸命になりすぎて、家族の人権をないがしろにする人が多い」と会場を笑わせつつ、エネルギーあふれる活動を讃えました。

受賞の挨拶でドクタカさんは「弁護士会の担当者に、なぜ自分が選ばれたのかと尋ねたら、4人の候補の中で一番無名だったから、と説明され、ありがたく賞をいただく気になった。先の分からないベンチャー企業に『がんばれ』という意味だと思う。

## 「愛・地球博」に参加します

### 来年5月、チルドレン・ファースト（英）と合同で

来年、愛知県長久手町、瀬戸市などで開かれる「愛・地球博」の主催者イベント「地球市民村」に、CAPNAも参加することが内定しました。

「地球村」は、日本国際博覧会協会が、市民参加の目玉として提案しているイベントです。長久手会場の「遊びと文化のゾーン」で国内外の有力なNPO/NGOの30ユニットに参加を求め、来場者が楽しく学びながら、これからの社会や地球環境などについて考えていく場を目指しています。

国内の団体がホスト役となり、1カ月間、パートナーの海外団体とともに、小パビリオンでのブース展示、ホールや屋外の広場での参加型体験学習プログラム、会議・シンポジウムなどを展開します。

CAPNAではプロジェクトチームを結成して、企画を協議してきました。その結果、昨年夏に岩城理事長、白石副理事長らが訪問して交流を深めてきたイギリスの「チルドレン・ファースト」に協力を求める案でまとまりました。

子どもたちが守られる社会づくりに向けて、日英の市民団体が一緒に考えていくという企画案を提出したところ、高い競争倍率をくぐり抜けて、採用が決まりました。

期間は、5月の1カ月間。「子どもの日」をメインに、さまざまなイベントを繰り広げていくことになります。協会から600万円を原則に、プログラムの制作、実践の経費が負担されます。しかし、方向性は決まったものの、中身を煮詰めるのはこれからです。自己満足ではなく、万博を訪れる大勢の人たちが、楽しみながら勉強できるイベントにしていかなければなりません。協会の出店条件には「日本語、英語の分からない来場者に対しても、視覚に訴えるなどして対応できる体制を取る」「1カ月間、4人が小パビリオンに常駐。さらに、3、4人がワークショップを担当、海外パートナーからのスタッフも、常に1人以上」などの項目もあり、これまでCAPNAが経験を積んできた子育てフェスタや虐待防止全国大会などでの展示、ステージ企画などは全く意味が違います。

どんな企画を立て、どうやって運営していくか、これから、スタッフで知恵を絞っていきます。会員の皆さん、ぜひ応援してください。

地球村のイベントの内容については、近く新聞紙上で発表される見通しです。

地元団体では、ほかに「おかざき匠の会」「ドングリの会」「エコプラットフォーム東海」「中部リサイクル運動市民の会」「ソムニード」などの有力な市民団体が名を連ねています。



地球村のホームページ

# JaSPCAN 京都大会 に参加して・・・

日本子どもの虐待防止研究会京都大会が昨年12月18、19日に、京都で開かれ、CAPNAからも大勢の専門職やボランティアが参加しました。すっかり恒例となった夜の全国交流会も、今年は子どもの虐待防止ネットワーク・しが（CAPNeS）のご尽力で大いに盛り上がりました。メンバーが大会で学んだこと、感じたことを報告します。

## 井上マジック

小久保 裕美

今大会で一番印象に残っていることは、私が報告した分科会が森田ゆりさんと一緒だったということである。発表の前から森田さんと同じ分科会と考えるだけで妙に肩に力が入っていた。森田さんは、私が初めて使うパワーポイントをセットしてやれやれと思っていたときにさっそうと会場に現れた。それは分科会の直前であった。そして、何も使わないからと司会者に断り、またあでやかに席に着かれた。森田さんの報告は予期したとおりに説得力があった。

司会者のコーディネイトで報告終了後に発表者全員が前に座り、質問を受けることになった。私は森田さんの隣であった。ふと森田さんの資料に目をやると、何度も注意して線を引かれたであろう箇所とか、読み込まれた文献が置かれていた。さわやかに質問に答える森田さんを隣で見つめながら、私ももっと努力しようと思った。

二つ目に印象に残ったのは、緊張するだろうと思っていた分科会がゆったりと過ごさせたことである。それは司会の井上薫さんのマジックによる。井上さんはすごい人だと実感した日であった。

## 乳児院問題を抜きにして論じて

矢満田 篤二

出席した第6分科会のテーマは、「親子分離後のパーマネンシープラン」。午前と午後を通して座長やパネリストたち9人と会場内からの発言を聞いて、相変わらず乳児院問題を直視していないことに失望した。乳児に愛着障害を形成する集団養育の問題点に切り込まず、パーマネンシープラン(永続的計画)を論じていたからだ。乳児期に安定した依存対象(通常は母親)を保障することは、その後の正常な人格形成に欠くことのできない発達課題である。児童虐待の底辺は不適切な養育であり、愛着の不形成が招く安定した依存対象の喪失は、広義の被虐待状態におかれていると認識していれば、親から分離した乳児を乳児院で処遇している矛盾を看過できないはずだ。8時間交替で保

育者が数名以上の乳児を一人で養育していることは、「病的な養育が障害された対人関係の原因」となりうる(参照:DSM-IV, 313.89)という指摘に、日本の虐待防止関係者が気付くのはいつだろうか。

## 教育現場における虐待への対応

兼田 智彦

1997年の横浜大会から学校教育の分科会に参加しています。昨年の東京大会からやっと現場の教師の参加が増えてきました。

京都大会では、仙台市沖野小学校の原先生から「学校での虐待の発見と対応」について先進的かつモデル的な発表がありました。原先生の印象では、児童相談所や弁護士が関わっている虐待のレベルと学校の教師が関わる虐待のレベルがかなり違っているのではないかといいました。

非行などの問題行動と虐待の関係について、どのようにとらえ対応するのかについて、現場の教師が虐待に関する基礎的な知識と対応のノウハウをきちんと学ぶことが大切で、CAPNAとしては、学校関係者虐待防止講座をとおして教室で気になる子どもたちの虐待を早く見つけて対応することが大切だと訴えました。

## 責任はどこに問うのか

田島 淑子

京都で迎えた静かな朝、そうっとカーテンを開けると音もなく雪が舞いほのり粧う白い世界に目を眩った。

その大会二日目、私は分科会「虐待とさまざまな子ども像」に身を置いた。

虐待を受けた子どもたちを第一線で保護し、ケア・治療を行っているパネリストの方々の、さまざまな虐待状況から生ずる多様な子ども像についての現場からの報告は胸に迫り、知らず知らず顔を伏せてしまう自分であった。特に虐待という体験が、感情調整・自己評価・他者との関係性といった点に多大な影響を与え、これらを起因として非行という問題行動で表れた時、「その責任はどこに問われるべきか」の投げかけは、被害者が加害者に転じる現実をまさに突き付けられたと強く揺り動かされたのである。

とても厳しく難しい報告の中で「過去は現在に影響するけれど、過去はあなたを支配しない」というメッセージは今も私の心の中にさざ波のような余韻を残している。

## チームを組んでいくこと

尾関 由美子

京都大会は私に大切なメッセージを残してくれました。今回、私は参加したといっても自分が何か発信者の役割をしたという訳でなくあくまで参加者という立場で3日間を過ごしました。その中で印象に残ったのは「チーム」という言葉。初日の国際シボジウムで、米国「子ども代弁者(CAC)」のキャロライン・レビットさんが今後のCACでの課題はチームだといっておられました。CAC

では多職種チームアプローチのもとにすべてのサービスが提供されているとの事、このチームをうまく連携充実させていく事が重要と言われていました。

いくつか分科会、一般演題にも行かせてもらいました。せっかくなので、普段なかなか情報を得ることができない医療現場での取り組みについての発表をきかせてもらいました。共通していたのは、やはりチーム、またはネットワークの大切さでした。

今回のJaSPCANは虐待の臨床現場をもつ人の学術集会の色が開催前から色濃くでているように思っていたのですが、やっぱりいつもCAPNAで話し合っただけのネットワーク、言い換えればチームともいえるのでしょうか。その大切さが虐待という現場にいる人達の中では専門性に関係なくテーマになっているのだなあと感じました。そして専門家であるにこだわらずチームを組んでいく事の大切さを教えられた大会でもありました。これからもチームを大切にしながらCAPNAの活動に参加していきたいとあらためて思っています。

## 人を育てていく機能

安藤 明夫

こうした研究会で、本音の議論を聴けると、得した気分になる。2日目の第2分科会「これからの児童相談所を展望する」。固い話になりそうな場を、本音モードに変えたのは、京都の児相OBの団士郎さんだった。

何か問題が起こるたびに国が次々につくる「プラン」の結果は、どうも大したことがない。人を増やしたら児相はよくなるのだろうか。市町村に権限移譲すれば改善できるのだろうか。そもそも今の児相はそんなに根本的に変えなければいけないのだろうか。現状は、何となくうまくやっている児相と、そうでない児相があるということじゃないのか。

柔らかい関西弁で、団さんはそんなふうに話を組み立てた。そして、児相という職場の「人を育てていく機能」が問われているのだと結論づけた。つまりは、職場のベテラン・中堅が、プロとしてきちんと仕事をし、それを見て育つ若手がいるかどうかということだ。

では、具体的にどうするかというと、これはかなり難しい。そもそも「専門性」の正体ってかなりあいまいだ。でも、よう分からんけど、うまく仕事回って、人が育つとる児相って確かにあるんやから、そこから学ぶしかないやろーこんな感じの話だった。

ぼくは常々、一人の「プロ」が成し遂げる仕事は、百人のセミプロに勝ると思っている。だから、団さんの指摘にかなり共感した。

会場とのフリートークでは、児相が「地獄の職場」として敬遠されている現状が次々に報告された。その中で、20代の女性は「今は交通局に配属されていますが、どんなに大変でも、児相に行きたい。そのために公務員になったんです」と訴え、拍手を浴びた。

若い「プロの卵」たちの情熱が燃え尽きないように、ぼくたち市民団体の側も応援していかなきゃ。